4　鍼灸・治効理論の変遷

高島文一

五六二年、大伴連狭手彦が百済から知聡を伴って帰国した。知聡は明堂図、本草書など医書一六四巻を持参した。この時から我が国の鍼灸術は始まったとされている。

この治効理論は『黄帝内経』に基づき、陰陽、虚実、表裏、寒熱の証を見て、とりわけ虚実に対して経絡、経穴部位に鍼灸の補瀉を行うことであった。

一八七四年以降は医師の資格は西洋医学をおさめた人だけに与えられたので、西洋医学の立場からの鍼灸の治効理論が必要となった。以下この方面の研究を行った人の名をあげて、その業績を検討する。

①大久保適斎　群馬県医学校長。一八九二年鍼灸は神経刺激術であり、殊に交感神経節の刺激が反射的に興奮を拡げて行くとした。内臓の直接刺鍼も神経刺激として効果のあることを述べた。

②三浦謹之助（一八六四～一九五〇）　東大内科教授。樫田、原田と共に施灸により、家兎の毛細血管が縮小し、次いで拡張すること、白血球数が増加すること、蛙の腓腹筋に施灸すると一時的攣縮をたかめることができることを実験した。

③後藤道雄　京大小児科にて皮膚の知覚過敏帯を研究し、一九一一年経穴はヘッド氏帯に相当するものであることを唱えた。ヘッド氏帯に鍼灸を行い、痛覚又は温覚を与える時は反射的にヘッド氏帯に一致する内臓の疼痛を皮膚に誘導し、自覚的の障害を軽減できるとした。

④石川日出鶴丸（一八七七～一九四九）　京大生理学教授。経穴に相当する部位に鍼灸をほどこすと自律神経を介して神経性調整機転なり液性調整機転のおこることを実証した。ラングレーの自律神経遠心性二重支配法則に対して自律神経求心性二重支配法則を唱えた。

⑤山下清吉　金沢大学病理にて一九三〇年頃、施灸により白血球数が増加すること、白血球游走速度の増加すること、白血球貪食の増加することを認めた。

⑥藤井秀二　阪大小児科にて一九二〇年代、小児鍼を行うと初期に血管は収縮し、後に拡張することを観察し、交感神経興奮がまずおこり、これが疲労すると副交感神経興奮に移行するものであるとした。

⑦瀧野憲照　京大法医学にて一九三〇年代に施灸により、体温が上昇すると血中のカリウムは増加しカルシウムは減少するが、体温が下降すると反対に、カリウムは減少しカルシウムが増加することを観察した。

⑧笹川久吾（一八九五～一九六八）　京大生理学教授。一九五五年頃、間中善雄と共に、家兎に鍼を刺入し留置すると、血中のマグネシウムが増加し、カルシウムは減少するが、時間が経過するとマグネシウムは減少しカルシウムは増加することを観察した。また、中谷義雄と共に、皮膚の電気抵抗を測定し、電気抵抗減弱点が、古来の経穴と一致することの多いことを実証した。

⑨木村忠司（一九一一～一九七六）　京大外科教授。一九五三年、関連病の研究を行い、脊髄内交感神経、白色交通枝、境界索の交感神経節の連絡の関係から上肢下肢への交感神経性の影響の及ぶ部分が、それぞれ小指側であり、副交感神経性の影響は、延髄、仙髄中枢を経て拇指側に及ぶことより、経絡という概念がそこから生れたものではなかろうかとの示唆を与えた。

⑩寺田文次郎　日大薬理で一九五二年頃、家兎に施鍼して、その血液を検すると、コーチゾンやＡＣＴＨに似た作用を呈すること、また抗アレルギー性、抗アセチールコリン性は増加し、蛋白分解酵素も増加することを実証した。

以上のような過程を経て、近頃は脳内鎮痛物質としてのエンドルフィン、エンケファリンの増加が問題となってきている。

（京都市）